丘の上にいるルルー・ダグラマシラの全長はおおよそ三十二メートルはあるだろう。遠目なうえに、ルルー・ダグラマシラは丸くなってしまっているので、おおよそ、というわけだ。あれだけ大きければ体内のルダラ鉱石も相当な純度なうえに大きさもすばらしいだろう。ダガル平地からはるばるドゥラーマ高地まで来た甲斐がある。今回の遠征費を賄えるのはもちろんのこと、村に収められる金額もこれまでにない額になるだろう。

一瞬、気が緩んだ。

やつはゆっくりと目を開け、身を反らせながら頭を上げた。明らかにわたしを見つけようとしていた。だがどの方向にいるかもわかっていないようだ。辺りをゆるやかに見回している。その目は黒々しているが、知性を感じる目をしていた。やつに逆に貶められて死んだ同業者の話を思い出し、背筋がゾッとした。しかし怖れを抑え、一層に気配を消した。

少なくとも五分はそうしていた。

やつはまた丸くなり、寝始めた。わたしはそのまま近づくことにした。

ルルー・ダグラマシラは聴覚も視覚もほとんどないが、その代わりに触覚と嗅覚が著しく発達している。触覚に関しては、他者からの視線も感覚として受け止めているという研究結果が出てしまっているくらいだ。それを西方からの貿易商から聞いた時には、なるほど、と納得した。祖父が殺されたのはそういうわけだったらしい。

無感情のまま、近づく。もう丘の麓まで来た。頂上に今もまだ丸くなっている。微動だにしない。……よし。射程まであと五十メートル。

わたしは立ち上がり、そのままゆっくりと丘を登った。この距離まで来たら這って進もうと立って進もうとも、見つかってしまえばその結果に違いはない。

徹甲弾を込めたライフル銃は最後まで皮袋から出さない。鉄と火薬の匂いを嗅がれた時点で終わりだからだ。その場合、やつはこちらに向かってくるでもなく、一目散に逃走するだろう。

……四十メートル。

思えば、長かった。

……三十メートル。

苦しくはなかった。

……二十メートル。

おそらく冒険は肌に合っているのだろう。

……十メートル。

ただ、やはり死ぬなら家で死にたい。

……ゼロ。

野ざらしは嫌だ。背からライフルを抜くとやはりやつは動き出した。それよりもずっとはやく、引き金を引いた。猛毒を塗った弾が突き刺さり、怪物はすぐに動かなくなる。

張っていた気が完全にゆるみ、尻もちをつくように座った。そのまま前のめりに倒れた。